慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	建築デザインの力で地方都市を活性化する：実践的なアクションリサーチの研究手法を展開
Sub Title	
Author	平塚, 裕子(Hiratsuka, Yuko)
Publisher	慶應義塾大学理工学部
Publication year	2019
Jtitle	新版 窮理図解 No.31 (2019. 10) ,p.2- 3
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001002-00000031-0002

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

今回登場するのは、建築デザインでコミュニティづくりに貢献する
ホルヘ・アルマザン准教授です。

建築デザインの力で地方都市を活性化する

実践的なアクションリサーチの研究手法を展開

今、日本の地方都市では、市民によるまちづくりプロジェクトがさまざまな形で進行している。高齢化と過疎化が進むまちに賑わいを取り戻すためには、コミュニティを育む拠点となる“場”の役割が重要だ。世界の都市を研究してきたアルマザンさんは、建築デザインを通して新たなまちづくりに貢献している。

行動（activity）をデザインする

建築デザインには３つの重要な要素があるとアルマザンさんは考える。それは形態（form）、環境（environment）、そして人々の行動（activity）だ。建築デザインの本来の主要なテーマは「形態」だったが、1970年代以降は、持続可能性（sustainability）が社会的に大きな問題となり、「環境」を考慮した建築が必要とされるようになった。

しかしながら「行動」の要素は、これまで十分に注目されてきたとは言い難い。「有名な建築家に依頼したら、かっこいいけれど使いにくいものになってしまった、という話はよく聞きます。それは私たち建築デザイナーの課題ですね」。

アルマザンさんは、この３つの要素がうまく実現した理想的な空間として、日本の“縁側”をあげる。「どんな縁側でも本当に美しいし、庇（ひさし）によって夏は涼しく、冬は暖かい構造です」。加えて外と内との中間領域にあることから、それぞれの活動を分断せずにうまくつなげる働きがある。「外を通る近所の人にあいさつしたり、誰かと一緒に庭を見てリラックスしたりするなど、縁側によって引き出される行動があります」。

このような行動を伴った空間を設計するためには、理論的に考えるだけではうまくいかない。実際に行動を起こし、その結果について検討を重ねることが重要である。

アルマザンさんは、このような研究手法として、社会心理学者のクルト・レヴィンが提唱した「アクションリサーチ（行動＋理論）」を建築デザインに応用している（次ページの図）。検討を重ねる中で、物事の背後にある深い問題に気づかされることもあるという。

横浜赤レンガ倉庫前広場のイベントの様子

広場で賑わいを生み出す実験をする

「これからは、行動（activity）をデザインすることが多く求められるようになると思います」とアルマザンさん。特に地方都市におけるプロジェクトでは、コミュニティを育み、地域の活性化に役立つ公共空間が必要とされている。そのためにはどのようなデザインにすればよいのだろうか。

これまでの都市研究において、人が集まって賑わうには、座って滞在できる公共空間が必要だと言われてきた。ところが日本には滞在できる公共空間が少ない。アルマザンさんは、座って滞在できる公共空間を提供することによって、日本の人々がどんな行動を取るか、現場で観察を試みた。

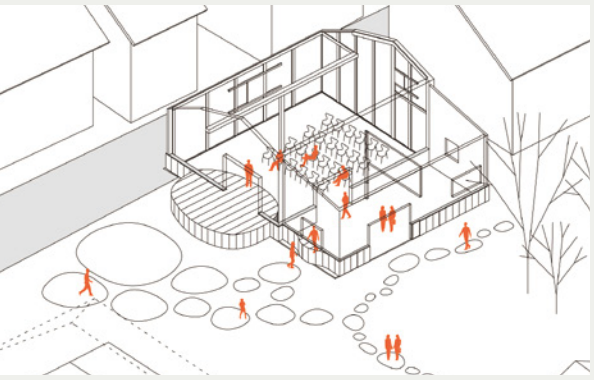
実験場所に選んだのは観光スポットとして人気の横浜赤レンガ倉庫（神奈川県・横浜市）。建物内はショップや飲食店があって賑わうが、中央に位置する広場は活用されておらず、がらんとしている。そこで、この場所に300脚の動かせる椅子を設置してみた。不要となった学校の椅子を市民参加型のワークショップでカラフルに塗装して生まれ変わらせ、低予算ながらも個性的で魅力的な椅子を作って広場の好きな場所で使えるようにした（左の写真）。

この実験は2016年１月に行われたが、真冬にもかかわらず多くの人が椅子を自由に使ってそれぞれの時間を楽しみ、賑わいのある空間になったという。当日の様子はビデオに収め、人々の行動を詳しく分析した。

アルマザンさんは、この実験結果を含め、これまでの研究成果を実際のプロジェクトの設計に生かしている。代表的

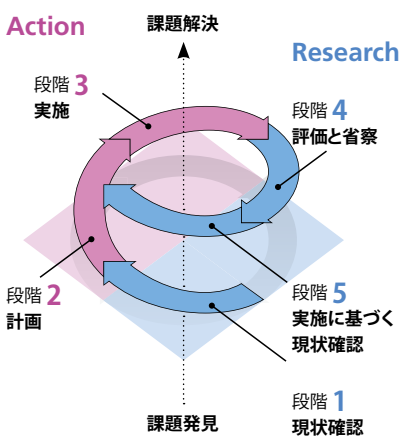
改修前の古い酒蔵。

いろいろな使い方で楽しまれる蔵と舞台。



人々の動線を検討するための設計図。

「旧二葉屋」の敷地内にある酒蔵を改修したギャラリー。



アクションリサーチによる問題解決手法

なまちづくりプロジェクトの一例を紹介しよう。

研究成果をまちづくりプロジェクトに活かす

上の写真と設計図は、山梨県市川三郷町に残る有形文化財「旧二葉屋」の敷地内にある酒蔵を改修してギャラリーにしたものだ。現地のまちづくり団体「市川マップの会」と共同で設計し、地域活性化の拠点づくりを目指した。ギャラリーの内外で多様な活動が行えるように、主屋とギャラリーの舞台をつなぐように飛び石を配置している。

「候補地は江戸時代の古い蔵でしたが、構造的に危険や問題はありませんでした。解体して新築する方法もありましたが、解体費用も高額ですから、リノベーションで活用することを勧めました」。いろいろな提案を模型を作って見せながら、市民たちと一緒に設計を進めたという。

このプロジェクトの一番の特徴である蔵の中と外がつながった舞台は、もともと予定されていたものではなく、ディスカッションの中から生まれたものだ。施設のオープン後は、能をはじめいろいろなイベントが頻繁に行われている。婚活パーティーでも盛り上がっているらしく、「地域に貢献できてうれしい。建築の力を実感します」とアルマザンさんは笑顔を見せた。

変わってきた建築家の役割

現在、ヨーロッパや日本では、新築よりもむしろ、建物の維持や再生など、リノベーションの重要性が増している。これにより、建築家の役割が拡張されているとアルマザンさんは言う。「コミュニティの運営や管理に関わったり、自分達で地域の問題を調べて解決策を提案したり、社会活動家に近い役割が求められていると感じます」。

このようなことから、アルマザンさんは自らの研究室の活動を、「社会活動（Social action）」「研究（research）」「学び（learning）」の３つの柱のもとに展開している。

アルマザンさんがとくに強調するのは「学び（learning）」の重要性だ。「研究と教育プログラムを分けて考える人も多くいますが、私はそれを一緒に考えています。だから「教育（education）」ではなくてlearningという言葉を使っているのです」。

学生には、実際のプロジェクトを動かしながら、多くのものを学んでほしいと願っている。これまでの建築の枠にとらわれずlearningする建築家の努力が、プロジェクトを活性化させ、成功に導くのだろう。

（取材・構成　平塚裕子）